

清代八股文における起講について

The Beginning Discussion Section of the Eight-legged Essay

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This essay is an exploration of the method of writing the “Beginning Discussion (qijiang)” section of the eight-legged essay. The “Beginning Discussion” is also known as the “Small Discussion (xiaojiang)”. It follows on from the “Breaking Open the Topic (poti)” and “Receiving the Topic (chengti)” sections. The first requirement of the Beginning Discussion section is to “speak on behalf of the sages”. As such, it is necessary first to provide a general explanation of how the rest of the essay will develop. Because of this, the method of addressing the topic in the Beginning Discussion is extremely complex. This essay provides a detailed explanation of both the form and the method of addressing the topic in the Beginning Discussion. First, I demonstrate that the Opening Discussion consists of four parts. As for the method of addressing the topic, although it is only to provide various explanations of the topic, in fact there are many different methods to address the topic. The essay also presents examples of twelve different ways to address the topic.

はじめに

商衍鑒（一八七三年～？）は、起講について次のように述べる。

承題の後は即ち口氣に入り、之を起講と謂う。起講の首の二字は「意謂」・「若曰」・「以爲」・「且夫」・「嘗思」等の字を用いて開端（始まり）とす。明[代の八股]文の起講は簡短にして僅かに三四句なり。清代は較や長く、約

十句上下なり。[その形式は] 起・承・轉・合あり。[そして、それらを] 或いは正に由りて反し、或いは反に由りて正す。意は分明なるを要し、單行中に仍お排語を用う。亦た散行（散文体）にして渾寫する者有り。[その] 法 亦た一ならず。須く全題を總括し、全局を籠罩（概括的）すべきを務む、故に起講を以て之を稱す（『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖試概紀及舉例釋義 第二節 八股文之文體・二三二頁～二三三頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷）。

破題・承題に続く部分を起講といい、「意謂」・「若曰」・「以爲」・「且夫」・「嘗思」などを頭に置いて始めの言葉とする。明代は三四句、清代は十句前後であり、それを対句にしてもよいし、そうしなくてもよい。その内容は概括的であり、形式は起・承・轉・合を用いて展開したりするというのである。

盧前は起講の形式について次のように言う。

[起講は] 亦た「小講」と曰う。十數句或いは數句に拘わらず、起・承・轉・合に分かつを要す。亦た反を用いて開合する者有り。其の法 甚だ多し。反起正收・正起反收の類の如し。老手は起・承・轉・合に拘わらず、散行（散文体）を以て題意を渾寫す。惟だ須く題理・題神^もを將^もって渾括包舉すべし（『八股文小史』第二章 八股文章之結構・九頁・一九三七年商務印書館刊）。

起講は、起・承・轉・合の形で段落分けを行い論旨を展開しなければいけない。そして、その段落分けしたものを開合法などを用いて変化をつけるとする。

また、王凱符（一九三四年～ ）は、次のように述べる。

破題・承題の後は起講である。起講はまた「小講」ともよばれる。その主要内容はやはり題目の意味を一步進めて發揮することである。起講のあたまには「且夫」・「嘗謂」・「若曰」・「嘗思」などの二音節語を多用する。そこで、八股文を批判する人はよく八股文を「且夫」調とか「且夫」・「嘗謂」の文だとか称する。ここには輕視する意味が含まれる。ただ実際には必ず二音節語を用いるわけではなく、「且」・「而」などの單音節語でもかま

わない。

明代の人たちの八股文の起講は比較的簡単で、一般には三四句で可能であった。清代はやや複雑になり、十句あまりを多用し、内容によって伸ばしたり縮めたりできた。起講の文章と破題・承題との文章との明確な区別は、「入口氣」、すなわち古人の語氣を用いた文体（対句も可、散文も可）、で始めなければいけないことであった（『八股文概説』上編 八股文概説 二、八股文的結構与作法 （三）起講・十一頁・中華書局・二〇〇二年刊）。

起講とは、破題・承題をうけた十句あまりの箇所^こで、孔子などの古人の語氣を用いて文章を作らなければならなかったというのである。

さらに、盛元均は『増訂初學起講秘訣』（光緒五年刊）において、破題・承題は自分の意見を述べるところであるが、起講は聖人・賢者に成り代わったつもりで全体の要点を簡潔に書く箇所^こであるという。

〔起講總論〕起講は、全篇の綱領^{おさ}を扼えて、其の主旨を發するものなり。謂うに一篇の文章 此れより開頭し説き起こせば、乃ち文章の冠冕なること、猶お人身の元首のごとし。斷じて草草として混過する可からず。蓋し破[題]・承[題]は皆な己の意に就きて斷做（論斷）す、是れ我が自己の口中の説話なり、故に古人に於いては稱するに「聖人」「賢者」等の字を以てす。起講の若きは、只だ事を記して斷做するを除くの外、口氣に盡し入る。是れ我 聖・賢に代わりて説話するなり。如し題[目]が是れ孔子の語ならば、我は便ち孔子に學び做りて講話するを要す。題[目]が是れ孟子の語ならば、我は又た孟子に學び做りて講話するを要す。我は即ち是れ彼なり。〔孔子や孟子などに成り代わっているのだから〕彼の口中は應に聖・賢等の字を以て自稱するべからず。須く是れ設身處地（孔子や孟子などの立場になって考える）を要すべし。如し君公に對して語^いえば、則ち書案の上、懷然として天顔 咫尺（近づき）し、我は臣列に鞠躬たりて、之を言うに懷懷たり。〔もし〕弟子に示し語^いえば、則ち几席の旁、宛然として生徒 侍立し、我 師位の端居し、之に誨えて諄諄たり。總するに是れ如何なる様の人・

如何なる様の事・如何なる様の時勢にして、當に如何なる様に説くべきかを看るを要す……（『増訂初學起講秘訣』先正法脈精言・一葉）。

拙稿では、

破題・承題・起講・入題・提股・出題・中股・後股・收股（乾隆丙戌〔一七六六年〕刊『文家規範』による⁽¹⁾）

のように分類される、清代の八股文のうち、起講を（1）表現方法・（2）形式・（3）解法の観点から検討を行いたい。

なお、問題文にあたる題目と八股文の導入部にあたる破題・承題とについては、「清代八股文の題目について」（『經濟理論』第310号）と「清代八股文における破題・承題について」（『經濟理論』第312号）とにおいて不十分ながら考察を試みた。

（1）表現方法

唐彪は『讀書作文譜』で起講はどのように述べればいいのかについて、梁素治の説明を引用する。起講はすべてを述べ尽くすのではなく、主旨を述べるにとどめるとするのである。

梁素治 曰く、起講とは、一篇の綱領^{おさ}を扼えて、其の主旨を發する者なり。最も宜しく渾融（融合）すべく、宜しく刻露（すっかりあらわにする）すべからず。起講の妙處は全く大勢を包籠（包含する）するに在り。虚にして乏しからず、既に能く全題の神を發し、復た能く全篇の局〔面〕を養え、斯れ作手（名人・名手）と爲す。善く起講を作る者は、出手（はじめ）

（1）ここでは、乾隆三十一年刊『文家規範』によったが、八股文の形式についてはいろいろな言い方や分類がなされている。たとえば、盧前は、

破題・承題・起講（小講）・領題（入題）・題比（提股）・出題・中比（中股）・後比（後股）・束比（多くは束比を用いず）・落下（收股）（『八股文小史』九葉～十葉・商務印書館・民國二十六年刊）。

このように分類する。また、王凱符は、

破題・承題・起講・入題・起二股・出題・中二股・過接・後二股・束二股・收結（『八股文概説』十七頁・中華書局・二〇〇二年刊）

としたりする。

常に春雲の乍吐き、曉日の初めて升るが如くし、含蓄蘊籍（含蓄があつてあらわさない）して始めて體を得ると爲すなり（康熙四十七年刊『讀書作文譜』卷之九・六葉）。

それは、何故かという、梁章鉅は『制義叢話』で徐倬弦の起講についての発言を引用して次のように言い、起講は全体の要旨を提示する（發凡）の箇所だからというのである。

徐倬弦 曰く、昔人 謂えらく「起講は發凡（全体の要旨を提示する）と爲す」と。蓋し全篇の文 此の起講に由りて其の大凡を發するを以てなればなり。夫れ既に之を發凡と謂えば、則ち宜しく虚にして宜しく實ならず、宜しく簡にして宜しく詳しからず、宜しく開門見山（最初から直ちに本題に入る：『滄浪詩話』）なるべく、而して蒙頭蓋面（顔をかくす）する可からず、宜しく提綱挈領（要点をつかむ）なるべく、而して籠侗寬鬆（大まかでゆったりしている）なる可からざるなり。此れを解して以て合式（規格に合う）と爲せば、則ち入手は便ち含蓄ありて局〔面〕を養い、緊醒（隙間無くはっきりさせる）にして題を擒^{とら}えるを知る。以後は淺きより深きに入り、自然井井（整然）として紊^{みだ}れず、頭下安頭（屋上屋を重ねるの意）にして、屋上 屋を架けるの病を免れる可し、と（『制義叢話』卷二十三・十二葉所引）。

また、張泰開は、『論文約旨』で起講の表現方法を次のように述べ、要点をはっきりさせて、言い尽くさないことであるとする。

起講の訣は、寛^{ひろ}くせず盡くさざるに在り。當に題意をしては^{はっきり}然とし、筆氣をして凌空（そそり立つ）せしむれば、自ずから盡して盡さざるの妙有り。題に粘（張り付く）して呆説するを得ず。起手（始め）は固より當に即ち題意或いは題中の字面^{じづら}を擒^{とら}えるべし。寛泛（内容・意義等が広範囲になる）なる可からず。然れども急ぎて題を擒^{とら}えんと欲するに因り、遂に突然に語氣を顧りみざる可からず。〔起講は〕須く是れ發端の語〔のよう〕にして、方（まさ）に得べし。若し題字 當に明見（明白）にすべき者あれば、則

ち直ちに説き出だし、字面を替身（みがわり）するを得ず。又た〔以下の部分に〕畧ぼ渉りて影響す可からず。漫として詩書を引く・又た最も字同じく、義異なる者を將って、借り來りて挑剔（けちをつける）するを忌む。……或いは排偶を用いるは、須く流利にして、板滯を忌むべし。又た必ず須く平仄聲調 諧協すべし（『論文約旨』不分卷・四葉～五葉）。

王企岬も『文家模範』で同様のことを言っている。

起講とは、一篇の綱領^{おさ}を扼えて、大意を渾發する者なり。蓋し八股は人の胸腹四肢の如し、而して起講は則ち其の首領なり。耳目口鼻五臟六腑の精英は、皆な首に聚まる。其の地（首の部分）爲るや多きこと無し。而れども虚靈（こころ）の竅穴 繋がる。文の一篇の體勢、悉く起講に振領すること、人の頭目の端、四體の觀瞻（外觀） 俱に聳えるが如し。故に善く文を作る者は、必ず先ず善く起講を作る。起講の筆法は最も題を擒える（擒題）を重んず。題を擒^{とら}えるは擒賊・擒王①の如く、中題の要害の處なり。然らば只だ宜しく擒^{とら}え定むべく、宜しく説煞（説きつくす）すべからず。須く餘勢有り、餘意有り、餘神有るを要^{もと}むべし。渾涵の大意は説破するに便ならず。又た糊塗ならしめず。黄葵陽の所謂ゆる題面（題目の意図が込められた部分）を掩却（隠して）して、自ずから一議を成すなり。合せて題面に到れば、却って自から移易す可からず、〔これが〕乃ち起講の正宗なり。起講は是れ單刀直入の處なり。宜しく徑捷（まっすぐ前進する）すべく、宜しく紆曲すべからず。宜しく一轉し便ち醒（はっきりさせる）すべし。宜しく多く轉じて後に醒（はっきりさせる）すべからず。此れ得失の關頭（要点）なり……（『文家模範』不分卷・二十九葉～三十葉）。

① 杜甫「前出塞詩」六首の「人を射ば先ず馬を射よ、敵を擒えんとせば先ず王を擒えよ」にもとづく。

さらに、趙國麟は『制義綱目』で、すでに破題・承題において大意を述べているのに、どうして起講でも大意を言わなければいけないのかを説明する。それは、起講が語氣（口氣）の始まりだからだという。ここから話し始めるので、改

めて後の部分の要点を述べなければならないからだというのである。

杜詩に云う「賊を擒えんとせば先ず王を擒えよ」（前出塞詩）と。言うころは領要を得るの謂いなり。帖括（八股文） 既に破〔題〕・承〔題〕を以て綱と爲せば、則ち領要 已に得たり、何ぞ須く又た擒えんとすべきや。〔起講は〕蓋し破〔題〕・承〔題〕の下、語氣に順うの始めと爲す。語氣必ず發端有り。發端 必ず大意有り。大意 明らかならざれば、則ち全題皆な根脉無し。是を以て古人 特に小講（起講）を制し、以て題起の原と爲す。故に又た「原起」とも曰う。乃ち語氣中に領要を提挈する處は、上の破〔題〕・承〔題〕と獨り明・渾の分有るのみならず、且つ詳・略の異なり有る者なり〔割注：破〔題〕・承〔題〕は題面（題目の意図が込められた部分）を明説し、小講（起講）は題意を渾言す。破〔題〕・承〔題〕は層折（文脈の変化）を詳題し、小講（起講）は梗槩を畧言す〕……（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・四十葉～四十一葉）。

このように起講は、具体的に題目を解釈する箇所ではなく、以下で展開する議論について概説的に要点を述べるところであるというのである。

では続いて、こうした要点はどのような形式に従って書かれたのかについて検討してみる。

（2）形式

『増訂初學起講秘訣』（光緒五年刊）によると、ふつう起講は起・承・轉・收の四段落に分けて説かなければならない。もちろんその四段落は意味が一貫したものである。もしも、この四段落に分けて説かないと、起講は平板なものになってしまうという。

〔論起講層次法〕：……起講の層次（文脈）は清なるを要し、層次中の語氣は貫くを要す。若し層次 清ならざれば、縦え好意・好詞有りて扣題（テーマにぴったり合う）するも、亦た是れ生柴（生乾きの木柴） 梱（たばね）を亂すなり。若し層次中の語氣 貫かざれば、即ち好意・好詞有りて題を

とら
 擒えるも、仍お散錢の串（つながり）無きが如し。大約毎個の起講中に定め
 て四層を要す。起の一層、承の一層、轉の一層、收の一層なり。起は即ち是
 れ開、承は即ち是れ中間の一つの紐（かなめ）、收は即ち是れ合なり。……
 [起講は] 長ければ則ち八句・九句なり。蛇を畫きて足を添え（蛇足）して
 以て太だ長きに至る可からず。短きも亦た六句・七句を要す。丈を縮めて
 尺と爲し、以て太だ短きに至る可からず。所謂ゆる一氣（氣脈） 起・承・
 轉・合（收）の數層の中に貫注するものなり。分看するに起は是れ一氣あ
 る幾つかの句、承・轉は是れ一氣ある幾つかの句、收も又た是れ一氣ある幾
 つかの句なり。合看すれば則ち數層は仍お是れ一氣呵成（首尾一貫してい
 る）するものなり。若し全く起・承・轉・收の層次無ければ、只だ糊塗なる
 一氣もて七句八句を平拖（平らに引きのばす）するのみ。奄奄（絶え絶え
 に）として振るわざれば、則ち層次 清からず。便ち起講を成さず（『増訂
 初學起講秘訣』先正法脈精言・二葉～三葉）。

そして『増訂初學起講秘訣』では、起講における起・承・轉・收の四段落の
 意味を、それぞれに分けて説明する。それによると、起とは次のようなものであつ
 た。

〔論起一層法〕：起は起首の第一層を謂う、開なり。……最も題の巔に高踞
 （どっしりと座る）し、起き得て勢いあるを要す。故に起は須く一頂を突起
 し、晴空に陡插（奮い立たせる）すべし。最も平衍（平板）を忌む。……
 故に起の處は兩句・三句なりて、最も陡峻（高く険しい）にして、絶えて挖
 踏（だらだらする）せざるを要す。一たび開口（話し始める）すれば、便
 ち英氣勃勃として、愼しみて寛話（とりとめのない雑談）を以て敷衍する
 勿れ。坊刻の初學の爛套（陳腐な常套句）の如きは、起〔の部分〕に「天
 下の事 亦た何ぞ常に之れ有るかな（天下事亦何常之有哉）」・「吾 甚だし
 くは夫の天下の事を解せず（吾甚不解夫天下事）」・「吾 今にして夫の天下
 の事を知る（吾今而知夫天下事）」及び「吾人 聖賢の業に従事す（吾人從
 事聖賢之業）」・「身を儒雅の林に置く（置身儒雅之林）」と「吾人 身を以

て世を渉る（吾人以身渉世）」云云を用う。此等は切ならざる套語（決まりの言葉）なり。何れの題にも用うる可からざるなり。久しく奉^うけたる功令（法令）もて嚴禁す。倘し父師 選讀を愼^もしまず、一たび初學の肺腑に入らば、則ち病 膏肓に染まり、終身 「救藥す可からず」（『詩經』大雅・板）。父師爲る者、宜しく常に警惕を加え、起の一層の油腔（内容のない）に落ちざる可きを庶^もうべし（『増訂初學起講秘訣』先正法脈精言・三葉～四葉）。

承の段落については次のように述べる。ただし、起の段落が明白であれば、この承の段落は設けなくてもかまわないとする。

〔論承一層法〕：承は起の數句の後の一層を謂うなり。起の意を承接して、之を講明するなり。單に一層を承けて、頓斷（断ち切り）して再び轉ずる者有り。起に虚字の住脚（末尾）を用いず、起に連なり一層の頓斷（間において中断する）を^な作す者有り。「蓋」字を用いて數句を頓（止める）して承を作す者有り。「夫」字を用いて數句を宕開（引き伸ばす）して承を作す者有り。更に中に蟬聯（連続する）する對の兩句、或いは對の四句を用い、上半は是れ承、下半は是れ轉にする有り。即ち所謂ゆる中の一つの紐（かなめ）は是れなり。若し起の一層 已に説きて明白なれば、則ち必ずしも承けざるも亦た可なり。蓋し起講に亦た三層を用いる者有り。起・轉・收にして承を用いずと謂う者なり。承の一層の爛套（陳腐な常套句）なるに至れば、毎に「何也」を接用して隔斷（さえぎり）し、自問自答す。或いは「某也者」を用いて、下註の語よりす。「豈に憂憂として之を難しとせざらんや（豈不憂憂乎難之哉）」・「夫れ豈に故無くして然云うや（夫豈無故而云然哉）」・「天下の事 大抵 斯の如きなり（天下事大抵如斯也）」・「往往 然るなり（往往然也）」・「比比 皆な是れなり（比比皆是也）」に及べば、此等の切ならざる承〔の段落で用いられる〕句は、亦た宜しく禁革（禁止して取り除く）すべし、〔そうすれば〕則ち承の一層 亦た油腔（内容のない）を免れる可きなり（『増訂初學起講秘訣』先正法脈精言・四葉）。

轉の段落については次のように解説する。轉は、起講においては文章に動き

をあたえる箇所であり、起講に轉の段落がなければ、ぼんやりとしたものになってしまうという。

〔論轉一層法〕：轉は既に承の後の一層を謂う。承くる所の起の意を將^もって又た轉出する一層なること、人の轉身の如し。轉ずれば則ち活潑なり。轉ぜざれば、則ち死相（絶え入りそうな様子）にして生氣無し。轉ずれば則ち靈動（生氣がある）なり、轉ぜざれば則ち蠢然たること土の木偶の如し。……若し初學の起講の轉ぜざれば、縦え能く題を擒えるも、究に止だ題に随いて一直に敷衍するのみ。但だ開口（話し始める）し即ち竭くるのみならず、亦た必ず醒快（すっきり）せず。轉の一層の套語（常套語）に至れば、毎に「然而して難きかな（然而難矣）」・「然らば亦た盡く然らざる者あるなり（然亦有不盡然者也）」・「然而して天下の事 亦た豈に一概に論ず可けんや（然而天下事亦豈可一概論哉）」及び「乃ち人有り（乃有人焉）」・「乃ち一事有り（乃有一事焉）」・「抑そも然らざるを知るなり（抑知不然也）」・「孰れが天下の事 大いに謬りて然らざる者有るを知らん（孰知天下事有大謬不然者）」を用う。此等の切ならざる轉の語は能く禁革（禁止して取り除く）を爲せば、則ち轉の一層は亦た油滑（内容のない）を免れる可きなり（『増訂初學起講秘訣』先正法脈精言・四葉～五葉）。

最後の收の段落は、全体を収めるところとなるとする。

〔論收一層法〕：收は後の一層を謂う。題位（題目の要求）を收合する處なり。或いは正收あり、或いは反收あり。俱に收得すること恰も題位の如くするを要す。腔滿ち氣足り（やる気が満ちる）、悠揚として盡くさざれば、既に侵溢（悪影響をあたえる）すること絲毫（わずか）ならずして、亦た本位（中心）を落空（ふい）にせず。截下等の題の如きは、下を留めることを要す。譬えば怒馬の奔馳し、崖に臨みて韁（たづな）を收むるに、[名人であれば]一抱すれば便ち自ら勒住（おさえとどめる）するが如し（止めたいところですぐに止められる）。平正（まっすぐ）なる單題は、堯（兜）繳なるを要す。[それは]又た譬えば三軍の進み戦うに、大將の旂脚 一た

び麾（さしず）すれば、一齊に退下するが如し。倘し挖踏（だらだらする）して黏連（気にかける）すれば、則ち尾 大にして運掉する能わず（尾が大きすぎて振れない・上よりも下の勢力が大きく統制が取れない）。若し收め開去（すす）めれば、則ち題神に肖^にずして、題位に合わず。如し氣 已に足れば、[それ以上は] 卻って又た添説（よけいなことば）なり。則ち所謂ゆる足下に足を贅（つけ）るなり。又た豈に善き收と謂う者ならんや。收の處の套語に至れば、則ち「大いに彰明較著ならざるや（不大彰明較著哉）」・「豈に人をして大いに思う可からざらしむや（豈不令人大可思耶）」・「抑そも又た何ぞや（抑又何也）」・「抑そも然らざるを知る（抑知不然）」及び「豈に其れ然らん哉（豈其然哉）」・「豈に人をして悠然として神往せしめざらんや（豈不令人悠然神往哉）」・「能く人の鄭重分明の想を動かさざらんや（能不動人鄭重分明之想哉）」・「竝びに一たび低徊し一たび神往す（竝一低徊一神往）」等の語有り。尤も厭う可きと爲す。能く痛懲（厳しく戒める）して永しえに之を禁ずれば、則ち收は亦た滑調を免れる可きなり（『増訂初學起講秘訣』先正法脈精言・五葉）。

このように起講は起・承・轉・收の四段落に分けて作成される。ただ、これだけでは平板であると考えられた。そこで、それに變化をつけるために反正法や開合法というものを加える。反正法は、反起正收法とか正起正收法などのように、組み合わせで用いたり、反説だけ、もしくは正説だけを用いたりすることもできる。しかし、開合法は開と合とを組み合わせで用いる。

まず、反正法⁽²⁾であるが、反説は「このようでなければ害がある」というように題目を逆から説く言い方であり、正説は、題目を正面からそのまま述べる言い方である。

〔論反正法〕：反とは、題面（題目の意図が込められた部分）に就きて反説（逆から述べる）するを謂い、正とは、題面に就きて正説（正面からそのまま述べる）するを謂うなり。若し題が本と是れ正題なれば則ち反面は是れ反なり。題が是れ反題なれば則ち正面は亦た是れ反なり。反ならざれば、

則ち正面は太^{はな}はだ實^{はな}にして太^{はな}はだ平なり（樸實にして華がない）、必ず不透不醒（すっきりしない）にして、且つ開口（話し）し盡^{つく}し易し（すべてをしゃべり余韻がない）。故に戦國の時の游士、此の如くせば便ち利ありと説かず、反^さつて此の如くせざれば便ち大害有りと説く。能く人主を悚動（震え上がらせる）する所以の者は、全く反敵（逆からとりあげる）を用う。『論語』（憲問）に言う管仲 桓〔公〕に相たりて、一匡の功有りと。若し之を正言すれば止だ宜しく「管仲有り、故に天下 其の功に頼る」と説くべし。卻^{かえ}って「管仲 微（な）かりせば、吾 其れ髪を被りて衽を左にせん」（『論語』憲問）と云うは、皆な反説なり。……然れども一味（単純）なる反説は、全く堯（兜）轉（余裕を持つ）せず、卻^{かえ}って又た本位（中心）を抛荒（なほざりにする）す。故に必ず反正 相い生ずれば方に妙なり（『増訂初學起講秘訣』先正法脈精言・五葉～六葉）。

開合法は、反正法と同じく起・承・轉・收の四段落に変化をつけるために用いられることが多い。ただし、開と合とを同時に使用し、ふつうは起の段落に開

- ✓（2）唐彪の『讀書作文譜』では、董思白の説明を引用して「反正」とは文章の最重要点であるとして次のように解説している。

〔反正〕董思白 曰く、反正は乃ち文の大機關（最重要点）にして、知らざる可からざるなり。且^{そも}も『論語』中に夫子の管仲を論ずるが如きは、若し之を正言すれば、則ち「管氏 禮を知らざれば、何等 明らかにし盡さん」と曰うに、却^{かえ}って又た「管氏にして禮を知らば、孰か禮を知らざらん」（『論語』八佾）と曰う。子賤尊賢取友は、若し之を正言すれば、只だ宜しく「魯 君子多し、故に取る所有りて以て其の徳を成す」と曰うべきも、却^{かえ}って「魯 君子無かりせば、斯れ焉くにか斯れを取らん」（『論語』公冶長）と曰う。此れ皆な反語なり……（『讀書作文譜』卷之七・六葉）。

- （3）『制義綱目』では、開合の意味を次のように解説する。

此の意を明らかにせんと欲し、先ず彼の意に即して以て之を發するを開と曰う〔割注：「孝弟」は「爲仁之本」（『論語』學而）と爲すを明らかにせんと欲して、先ず「君子務本」を發し、「致中和」（『中庸』第一章第五節）の效を明らかにせんと欲して、先ず「中和之徳」を發するが如き、是なり〕。既に彼の意を明らかにし、忽ち前の意に接し以て之を印すを合と曰う〔割注：「孝弟也者」（『論語』學而）と「致中和」（『中庸』第一章第五節）の「致」字とは、皆な忽ち上文に接するが如き、是れなり〕。合無ければ、則ち開を爲す所無し。開無ければ亦た以て合を見ず無し〔割注：聖賢の言は、皆な實理あるなり。合を以て之を形わせば、方に其の開を知る。開無ければ、則ち皆な合のみ〕。故に分かちて之を論ずれば、開は引に似たる有り……（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・二十九葉）。

を、收の段落に合を用いるとする。ただし、同じ段落内や、一二句の中においても、開合法を用いることができるという。

〔論開合法〕：開は多く起に用う。合は多く收に用う。而れども一層の中に亦た開合有り、一二句の中にも亦た開合有るを知らず。〔そもそも開合法とは〕抑（おさ）えんと欲して先ず^あ揚げ、揚げんと欲して先ず抑えるが如し⁽⁴⁾。〔そのため〕起の處に用うるは固より多し。然れども亦た題面（題目の意図が込められた部分）に切合（十分に符合して）して直起し、「夫」字を接用して宕開（引き伸ばす）する者有れば、亦た先合後開有るに似たり。但し開の後には仍お合すれば、還是（やはり）是れ先開後合なり。中間に至りて一開一合有り。亦た兩開兩合有り。收處も亦た一句の開・一句の合なる者有り。即ち用うる字も亦た開合有り。如し將に「又」字を説かんとすれば、必ず先ず「既」字を説く。將に「今」を言わんとすれば、必ず先ず「昔」を説く。將に「何況」を言わんとせば、必ず先ず「猶且」を言う。將に「及其」を言わんとせば、必ず先ず「方其」を言う。之を總するに一開一合は便ち機勢（形勢）有り。若し開せざれば、又た甚麼^{なに}に合せんや（合個甚麼）。今の門の如きは、必ず先ず推し開き、始めて其の合（閉まる）を見る。若し開かざれば便ち是れ題に靠（くつつい）た死板語（硬直した言葉）にして、既に活動せず、亦た其の合（閉まる）の妙を見ざるなり。開は即ち是れ賓、合は即ち是れ主。開合の法を知れば、即ち賓主の法を知るなり（『増訂初學起講秘訣』先正法脈精言・六葉～七葉）。

このように起講は、起・承・轉・收の四段落に分けられ、それに變化をつける

（4）唐彪の『讀書作文譜』では、「抑揚」を次のように解説している。

唐彪 曰く、凡そ文 發揚せんと欲すれば、先ず數語を以て束抑し、其の氣をして收斂し、筆情 屈曲せしむ、故に之を抑と謂う。抑の後、隨いて數語を以て振發するを、乃ち之を揚と謂う。文章をして氣有り・勢い有り、光焰 人に逼らしむ。此の法 文中に之を用いること極めて多く、最も緊要（重要）と爲す。太史公の諸々の贊は、乃ち抑揚の一端なるも、全體に非ざるなり。世人 知らず、竟に以て其の法と爲し、止だ之を人物を評論するのみに用いる可きと爲すは、何ぞ其れ此の法を小視するや……（『讀書作文譜』卷之七・八葉～九葉）。

ために反正法や開合法などが加えられるのである。

では続いて、具体的に起講の解法について考えてみる。

(3) 解法

起講の解法については、様々なものがある。以下において、『増訂匯學讀本』で説明された次の十二の解法、

- ①高一層擒題法・②對面擒題法・③低一層擒題起法・④借擒題起法・⑤點染映合擒題法・⑥暗擒題起法・⑦明擒題起法・⑧引古擒題起法・⑨兩層夾翻法・⑩通講全翻一句到題法・⑪旁面擒題法・⑫借賓定主法

について例文とともに述べてみたい。

①高一層擒題法（高一層もて題を擒える法）

高一層法とは、

題〔目〕 士を説けば、〔八股〕文 賢より〔説き〕起こし、題〔目〕 賢を説けば、〔八股〕文 聖より〔説き〕起こすは、即ち是れ高一層法なり（光緒五年『初學題類文法合編』下卷・三葉）。

といわれるように、題目の一段上の視点から題目を擒えて解釈する方法である。

高一層擒題法 第一則

小題の開首は最も平衍（変化に乏しい）を忌む。……〔そこで〕其の法は上一層（一段を上る）を推すより妙なるは莫し。或いは源頭（根源）に溯（さかのぼ）りて落下（おりる）す、或いは前路より著筆（書き始める）す。……後の承・轉に入れば、勢いに順いて直落すること、峻馬の坂を下るに崖を崩し石を墮すが如きに似たり。恰も本位を得れば、綽として餘歩（ゆとり）有りて、自ら重複の弊有るを致さず。此れ即ち前一層（一段を進める）の法にして、初學第一の妙劑と爲す……（『増訂初學起講秘訣』高一層擒題法・一葉）。

題目：學而時習之（『論語』學而）單句題 高一層擒題反起正收法

且天下不學而知，不學而能者，惟聖人爲然，下此者其能已於學哉，顧學之事
反起 本屬無窮，而學之功不容有間，所貴乎黽勉爲懷而不以作輟之念乘之也／吾今
正承 正轉
正收 與天下言學矣 末句

（且^{そも}も天下に學ばずして知り，學ばずして能くする者は，惟だ聖人のみ然りと爲す，此に下る者は其れ能く學ぶに已^やまんや，顧だ學ぶの事は本と無窮に屬し，學ぶの功は間（へだて）有る容らず，黽勉^{べか}に貴ぶ所 懷と爲して作輟（やったりやめたり）の念を以て之に乗ぜざるなり／吾 今天下と學ぶを言う）

〔作法〕反起〔の部分〕は高一層なり。先覺の人より説き下す。題は是れ「學」なるも，學ぶを待たずを説く，故に反なり。正承の一層は，題面（題目の意図が込められた部分）の「學」字を明擒す。正轉の一層は，「學」字に明跟し，「時習」を暗籠す。正收の一層は，一句もて「時習」の正面に還り，一句もて「時習」の反面に繳（渡る）り，最も清楚なり（『増訂初學起講秘訣』起講秘訣高一層擒題法・一葉～二葉）。

②對面擒題法（對面もて題を擒える法）

對面とは、

對とは、我と相い對して待す者なり。題〔目〕「父 子を愛す」と説けば、則ち「子 父を愛す」は便ち是れ對面なり。題〔目〕「我 人を敬す」と説けば、則ち「人 我を敬す」は便ち是れ對面なり。此れ亦た題の影位なり（光緒五年『初學題類文法合編』下卷・三葉）。

というものである。反面からでも正面からでも題目をはっきりと捉えることができない時は、對面法を用いる。對面擒題法とは、隙を見せて相手を誘い込むように、題目の向こう側から題目を解釈する方法である。

對面擒題法 第二則

凡そ題に反面・正面の擒えて不醒（はっきりしない）者有れば、須く對面の法を用いて之を擒えるべし。〔それは〕譬へば對手に敵逢（敵対）し、其

の勝負未だ分かつずに當り、黠（わるがしこい）者 遂に刀を拖きて反走（退却）の計を爲し、其の追遂し近前（近づく）するを待ちて、身を轉して擒住（つかまえる）するが如きなり。亦た勝ちを制するの奇なり。然らば須く先ず一枝の好筆（すぐれた文）を學びて、撇脱得快（早く明解にする）にすべし。若し笨拙（にぶい）人 便ち拖泥帶水（言葉が簡明・明解でない）にして、轉折するに不靈（悟らない）ならば、而らば題意 反って不醒（はっきりしない）にして、題面（題目の意図が込められた部分） 反って清からず。對面は能く暗擒すれば更に妙なり。〔しかし〕即ち明擒して題字を將って全出するも、亦た自ら妨げあらず。蓋し字 明説すと雖も、而れども意は對面に在り、卻って主位を實填するに非ざる者なり。此れ初學の絶妙の金丹なり……（『増訂初學起講秘訣』對面擒題法・九葉）。

題目：就有道而正焉（『論語』學而）單句頂上題 對面擒題正起正收法
 且君子者道之宗也，行誼卓然，天下方共思就正矣，顧請業偕來，在人自作觀
正起 且君子者道之宗也，擒道字 行誼卓然，正承 天下方共思就正矣，擒就正 顧請業偕來，正轉 在人自作觀
 型之想，而折衷靡懈，在我終無滿假之思，詣愈實者心愈虛，詎得謂業精於己，
反收 而不思抑止於人耶

（且そも君子とは道の宗なり，行誼 卓然として，天下 方に共に就きて正すを思う，顧だ業を請いて①偕に來るは，人に在りては自ら觀型の想を作す，而れども折衷して懈（おこたる）こと靡なければ，我に在りては終に滿假（誇る）の思い無し，詣るに愈いよ實なる者は心 愈いよ虚なり，詎ぞ業己に精なり②と謂うを得て，而して人に抑止③するを思わざらんや）

- ①『禮記』曲禮上に「業を請えば則ち起ち，益を請えば則ち起つ」。舞（〔註釋〕十一葉*以下，該当箇所^{*}に註釋が附されている場合は，註釋と葉数とを示す。それが無い時は，筆者による註である）。
- ② 韓愈「進學解」に「業は勤めるに精しく，嬉しむに荒む」（〔註釋〕十一葉）。
- ③『詩經』小雅・車牽に「高山は仰ぎ，景行は行く（高山仰止，景行行止）」（〔註釋〕十一葉）。

〔作法〕正起の一層は、「道」字に對面するを將って、「君子」の上に移り向かいて説く、正承の一層は、對面して君子の「有道」を説く。人 都（すべ）て君子を正すに就き、君子は必ずしも人に求めず。正轉の一層は、君子を見るに亦た當に正に就くべしとす。反收の一層は、君子の心を説き出だし、豈に正に就くを思わざらんや（『増訂初學起講秘訣』對面擒題法・十一葉）。

③低一層擒題起法（低一層もて題を擒え起める法）

低一層擒題起法は、視点を低くして題目を擒えて解釈する方法である。

低一層擒題起法 第三則

題に平もて做る・順もて做るの不醒（はっきりしない）者有りて、又た高一層の議論無ければ、低一層を用いるより妙なる莫し。倒轉逆攻法は即ち後一層の法なり。後に由りて前に溯（さかのぼ）る、[たとえば] 下より上を撃つこと、敵人の上游に控據（對陣）するの勢い有り、我 更に出でて其の上に駕する能わず、只得だ偏師（小部隊）を暗用し、敵の背後に繞出す、或いは雲梯（攻城用の長い梯子）百歩を用いて下より升る、或いは地炮百座を用いて下より震わせば、能く堅城をして立ちどころに破れ、勁敵（強敵）も即ち解するが如し。但だ低擒の一法は、低一層より説き起すに過ぎざれば、倒って本題の正位を撃ち醒ますのみ。[ただし低一層は] 用筆（筆遣い）・措詞（言葉を選ぶ）を落想（レベルを下げる）するに非ず、[もしそうであれば] 皆な低くして高からざるなり。蓋し名 低擒と雖も、實は則ち眞に逼ること高著なり。初學 此れを服せば、則ち珠簾 倒って捲き[上がったように、また] 自然の幽壑 千尋 [のように] して、人の意表に出づ。此れ醫家の倒攻（裏から攻める）の法なりと云しかいう（『増訂初學起講秘訣』低一層擒題法・十五葉）。

題目：恥躬之不逮也（『論語』里仁） 截上題 低一層逆折擒題正起正

收法

今夫人於踐履之餘，苟其莫副所言也，未嘗不竊竊然恥之，雖然恥在言後，言

正起

擒恥字

承・正轉

已一往而難追，何如恥在言前，言以三緘而彌愼，^{正收}前修無盡，而後顧堪虞，古人用是兢兢焉／如言^{末句}之不出，古人非預爲躬行地哉

(今、夫れ人 踐履之餘に於いて、苟し其れ言う所に副うる莫きや、未だ嘗て竊竊然として之を恥ず、然りと雖も恥は言の後に在り、言 已に一たび往きて追い難し、如何ぞ恥 言の前に在りて、言 三緘を以て①而して彌ます愼しまん、前修(前代の賢者) 盡くす無し、而して後堪虞を顧みる、古人是を用いて兢兢なり／言の出でざるが如ければ、古人 預め躬行の地を爲すに非ずや)

①『孔子家語』觀周に「孔子 周を觀、遂に太祖后稷の廟に入る。廟堂の右の階の前に金人有り。其の口を三緘して、其の背に銘して曰く、古の言を愼める人なり……」(〔註釋〕十七葉)。

〔作法〕正起は低一層なり。常人の行いは言の後に逮ばず、然して後に恥を知るを言う。承・轉の一層は、今人より古人に説き到る。正收の一層は、古は出去せざるに歸り到る(『増訂初學起講秘訣』低一層擒題法・十六葉～十七葉)。

④借擒題起法(借擒^{はじ}もて題を起める法)

借擒題起法とは、題目から直接に糸口を引き出せない場合に、題目にあるもの以外のもを手がかりにして文章を組み立て題目を擒えて解釈する方法である。

借擒題起法 第四則

借擒とは、本題(題目の主題) 發端(出發)に難きを以て他義に假借して以て之を引き起こすなり。本題の外より借入する者有り、題内より借入する者有り、喩意より借入する有り、正意より借入する者有り、章旨・節旨並びに遠近の來脈(文脈)及び上文より借入する者有り。更に下文を倒影して借入する者有り。法は亦た一ならず。要するに借り以て發端とし、擒題(主題をとらえる)の計と爲すに過ぎざるのみ。卻つて認真不得(まじめにとらえることはできない)ない。譬えば征伐するに、本國の兵 少な

く、敵を擒うる能わず、姑く別國の兵を借りて以て之を助け、戦い勝つの後、既に敵人を擒うるに迫れば、則ち仍お各々歸り各々營し、散擾（乱暴狼藉）せしめざるが如し。故に借擒の後、必ず須く撤去（撤退）すべし。喧客奪主（主客転倒）せしむること勿れ、[そうすれば] 則ち眞に借擒に善し。借法に至れば、亦た暗借なる者有り。[それは] 即ち或いは明借の題字を將つて俱に出し、仍お實に本位を占める者の比に非ざるなり。……能く此の法に熟せば、……^{さいてん}衡文する者をして一見して擊節（賞賛・ほめる）せしむるに足る（『増訂初學起講秘訣』借擒題法・十九葉）。

題目：如臨深淵（『論語』泰伯）單扇喻意題 借題中正意順折擒題正起

正收法

嘗聞孝子不臨深，畏其險也，顧險有在於有象者，^{正起}險亦有在於無形，則不必身臨其境，而後知所畏也，亦惟以監於水者，^{正承}監於身而已^{正轉}

（嘗て聞く孝子は深きに臨まざるは①，其の險なるを畏れればなり，顧だ險は有象に在る者有り，險の亦た無形に在る有れば，則ち必ずしも身は其の境に臨まず，而して後に畏る所を知るなり，亦た惟れ水に監みる②者を以て，身に監みるのみ）

①『禮記』曲禮上に「人の子爲る者は……高きに登らず，深きに臨まず……」（〔註釋〕二十一葉）。

②『書經』酒誥に「古人 言有りて曰く『人は水に於いて監みる無し，當に民に於いて監みるべし』と」（〔註釋〕二十一葉）。

〔作法〕正起の一層は，古に借りて題字に關合（関連照応する）す。正承・〔正〕轉の一層は，題位に虚籠す。正收の一層は，撇筆を用いて「如」字を擊醒し，恰も本位に合す（『増訂初學起講秘訣』借擒題法・二十一葉）。

⑤點染映合擒題法（點染映合もて題を擒える法）

點染映合擒題法は，起講の文章を色付けしたうえにあざやかにして題目を擒えて解釈する方法である。

點染映合擒題法 第五則

題 直ちに擒え得ずして通套（慣用的表現）に易き者有れば、須く題中の字面（表面上の言葉）に傍（寄り添う）して點染（色をつける）して之を映合（照り映える）すべし、此れ不切（適切でない）の切（適切さ）なり。蓋し小題は花鳥を畫くが如し、獨り鳥の飛び鳴くも、何の意味有らん。井花爛漫なるも、亦た風情を少く。惟れ鳥にして之に襯えるに茂林修竹を以てし、花にして之に襯えるに怪石清波を以てすれば、則ち彼此 映發（照り映え）し、趣を生ずること盎然（満ち溢れる）たり。閱る者をして心暢（心地よい）し神怡（快適）たらしむ。斯れ寫生の妙手と爲し、亦た枯小題の妙訣と爲す。初學に在りて若し能く此の法を知れば、則ち清新（新鮮さ）を出すに窮まり無く、自ずから題の束縛する所と爲らず。但だ運筆は宜しく意を以て勝るべし、辭を以て勝るべからず。辭 多ければ、則ち意 掩（おお）わる。點染の一法は、略ぼ藻積（文章）に施すと雖も、之を究めるに意 仍お清真（純潔で質朴）にして、用いる所の典故は、皆な題中の正面の實語に非ざれば、旁よりの發論（議論を出す）にして、題面（題目の意図が込められた部分）に關合するに過ぎざるのみ。倘し映合 天然に本づかざれば、則ち胭脂を多く買いて牡丹を畫くも、又た豈に初學に宜しき所ならんや。故に借擒〔題起法 第四則〕の後に列す。亦た醫 俗なるも、而して其の胸の靈敏穎思を開く可し、云しかいう（『増訂初學起講秘訣』點染映合擒題法・二十四葉）。

題目：居無求安（『論語』學而）

點染映合擒題正起正收法

且我心之内有安宅，固所謂天下之廣居也，顧宅其心者爲居，而宅其身者亦爲居，至心之所注，并不暇及於身焉，斯固非懷居者所得而擬已

（且そも我が心の内 安宅有り，固より所謂ゆる天下の廣居なり，顧だ其の心に宅する者は居と爲す，而して其の身に宅る者も亦た居と爲す，心の注ぐ所に至れば，並びに身に及ぶ暇あらず，斯れ固より居を懷う者①の得て己に擬する所に非ざるなり）

- ①『論語』憲問に「子曰く、士にして居を懷うは、以て士と爲すに足らず、と」。

〔作法〕正起の一層は、「安」字・「居」字に映合し、下意に雙關（二つにかかわる）す。承・轉の一層は、「居」字を剔醒（ひきだしはつきりさせる）す。正收の一層は、仍お下意を含み、「無求」に拍合（テンポを合わせる）す（『増訂初學起講秘訣』點染映合擒題法・二十五葉）。

⑥暗擒題起法（暗擒もて題を起すの法）

暗擒題起法は、題目の要所を押さえながらも、はっきりと表現せずに解釈してゆく方法である。

なお、暗擒の要点は、嘉慶十四年二甲七十三名の進士である魏茂林の『文法一揆』（道光二十一年〔一八四一〕周際華序）によると、題目によって意味を導き出し、題目によって形をつくることであるという。

題に因りて義を立て、題に随いて屈折すること、「水輶（水車）を納めるが若く、丸珠を轉ずるが如し」（唐・司空圖『詩品』）。此れ暗擒の妙なり（『文法一揆』卷一・擒条・一葉）。

暗擒題起法 第六則

暗擒は即ち渾擒の起法なり。但し渾起は是れ一つの題の大意に就きて、渾渾（渾沌）として籠罩（概括的）なり。暗擒は止だ題面（題目の意図が込められた部分）の字眼（文字）を擒えるのみならず、題中の一二の字の意に咬（こたわ）り出し、隱貼暗扣（暗中に拘留する）して、筋骨（キーポイント）をして太はだ露わにせしめず。〔また暗擒は〕但だ字の意の融洽（融和）するを覺ゆれば、題 自ずから環中（範圍）を出でず。然らば亦た止だ本題の字面（表面上の言葉）を露出せざるのみ。其れ顯明清高なれば、究に亦た未だ嘗て明擒と其の醒快（すつきりさせる）を同じくせずんばあらず。閱る者をして一望して其の某題の起講と爲るを知らしめ、界限（範圍）了然たらしむ。若し昏昏（ぼんやりと）悶悶（分別なく）として題

目を掩い卻け、甚麼（どんな）話しを説くかを知らざれば、便ち是れ蒙頭蓋面（顔が分からなくなる）にして、題字 暗にして題位（題目の要求・作文の規則） 亦た晦し、則ち暗擒に善からざる者なり。迷途に入るに幾からざらんや。須く題意に傍（寄り添う）を要して、即かず離れざるべし。近ければ則ち太（はな）はだ著われ、遠ければ則ち太はだ泛し。務めて本題の字面をして恰も涵蓋（包括）するの中に在らしむ。此れ初學の當に細心に咀味（味わい）し、精研（研鑽）して久しく服すべき所の者なり（『増訂初學起講秘訣』暗擒題起法・二十八葉）。

題目：吾未見剛者（『論語』公冶長） 單句有實義題 暗擒題意正起正

收法

且聖賢之異於人者、惟此毅然之心而已、使此詣而不絶於今也、斯固我道之幸也、乃此詣而竟絶於今也、斯亦吾道之不幸也、望之甚殷而遇之莫必、覺堅貞之士徒得諸想像間耳

正起 擒剛字 反承
正轉 正收

（且そも聖賢の人に異なる者は、惟れ此の毅然の心なるのみ、此をして詣りて今に絶えざらしむるや、斯れ固より我が道の幸いなり、乃ち此の詣りて竟に今に絶えるや、斯れ亦た吾が道の不幸なり、之を望むに甚はだ殷にして之に遇うに必ずする莫し、堅貞の士 徒に諸を想像の間に得るを覺えるのみ）

〔作法〕正起の一層は、「剛」字を暗擒す。反承の一層、及び正轉の一層は、卻って好く開合して題に到る。正收の一層は、「未見」の意を醒まし、「者」字の虚神 亦た到る（『増訂初學起講秘訣』暗擒題起法・三十葉～三十一葉）。

⑦明擒題起法（明擒もて題を起すの法）

明擒題起法は、最初から直ちに本題に入り、発言が急所に命中するように題目を解釈する方法である。

明擒題起法 第七則

明擒は初學の第一の階梯と爲す。擒とは、題中の緊要（重要な）の字眼（文字）を審定（審査評定）するを謂う。一題の主帥（統率者）と爲る者は、

明明白白に、一把（しっかりと）に扭住（つかまえる）し、正・反 俱に放鬆（おろそかにする）にせず。之を譬えるに賊黨の極めて多くして、先ず小兵を擒えず、止だ直ちに營中に入り、一把（しっかりと）に大王を將って擒住（とらえる）すれば、便ち壘（砦）を破る可し。……此れ先輩の所謂ゆる開門見山（最初から直ちに本題に入る：嚴羽『滄浪詩話』詩評）にして、一矢もて破的す（発言が急所に命中する）るなり。閱る者をして一見して見爽（明晰）ならしめ、擊節（十分に賞賛）して快を稱せざる者無し。故に此の法 最も殻に入り（術中に入る）易く、亦た摹倣し易し。眞に初學の一帖の清涼散なり。然れども亦た止だ一二字を明擒し、鄭重に之を出だし、反・正もて之を攻む可し。大約 意を用いるに宜しく反面・側面に在るべし。硬（むり）に全題を將って囫圇（まるごと）正出して裏を吞む（まるごと裏を飲み込むように、何の検討も加えずに鵜呑みにすること）の病を犯す能わず（『増訂初學起講秘訣』明擒題起法・三十二葉）。

題目：賢哉回也（『論語』雍也） 贊歎發端題 明擒切合正起正收法

且惟賢可以希聖，而爲士必先希賢，顧識不遠不足以爲賢，守不固不足以爲賢，
正起 擒賢字 即一私之未融一念之未純者，亦不能遽以爲賢，賢亦難乎其人矣，而吾乃有契
反承 反轉 於顏氏之子也 正收

（且そも惟だ賢のみ以て聖を希む^{のぞ}可し，而るに士爲るは必ず先ず賢を希む①，顧だ識 遠く以て賢爲るに足らずんばあらず，守 固より以て賢爲るに足らずんばあらず，即ち一私の未だ融せず・一念の未だ純ならざる者あれば，亦た遽かに以て賢と爲る能わず，賢は亦た其の人に難し，而して吾れ乃ち顏氏の子に契^{かな}う有るなり）

①『通書』志學第十に「聖は天を希み，賢は聖を希み，士は賢を希む」（〔註釋〕三十五葉）。

〔作法〕正起の一層は、「賢」字を明擒す。反承の一層は、下意を渾含し、「賢」字を折開し、一氣もて滾下す。正收の一層は、本位を掉轉す（『増訂初學起講秘訣』明擒題起法・三十五葉）。

⑧引古擒題起法（引古もて題を擒えて起すの法）

引古擒題起法は、經書の言葉を引用して文を作って、題目を擒えて解釈してゆく方法である。ただし、起講は古人が言っているという体裁をとっているので、經書の引用には注意が必要となる。

引古擒題起法 第八則

引古とは、經典中の古人の成語を援引し、題中の語と同じく意もて合する者なり。特に引來（引用）して以て本題の縁起と爲し、随いて即ち緊緊に本題に黏入（くつつけ入れる）す。但し接するの法は宜しく爽快（單刀直入）なるべし。宜しく迂緩（緩慢）なるべからず。或いは反、或いは正、或いは明、或いは暗、或いは點染、或いは借、或いは高、或いは低、或いは對面、其の法は仍お上〔述〕^{ママ}の七法の中に貫入す。止だ款式（形式）の同じからざる有るのみ。乍（ちょっと）看るに借擒に近し、而して實は借に非ず。蓋し借は乃ち假借（名義を借りる）の謂いなり。此れ（引古）は乃ち題の實に靠りて正意（本来の意図・主要な意味）を説く。〔そして、引用した〕語は本位に非ず、經典の内の古人の口中の語に就きて、端（きっかけ）を引きて論を發するに過ぎざれば、假借に非ざるなり。又た點染に似て、亦た點染に非ず。蓋し點映（飾ること）は是れ喩の意、題中の字面^{じづら}に關合（関連して呼応する）す。此れ（引古）は乃ち語説^{じづら} 相い字面に似たり、點映に非ざるなり。之を要するに古を引くは止だ一二の語を引き、本題の引子（前置き）と做す可し。便ち單刀直入なれば、乃ち佳し。然れども亦た萬に用うる可からざる者有り。援引題・引證題に遭えば、則ち用うる可からず。蓋し此の二種は、或いは『詩』を引く・『書』を引くに係り、是れ題 已に古を引けばなり。〔したがって〕又た他の經を引きて白文と別に枝節（別の事）を生ぜざらんや。蓋し古例を引きて、前に「嘗聞」・「嘗讀」の字眼（文字）有れば、必ず六經〔を引用するには〕三代以上の史を鑑みて、孔・曾・思・孟に在る〔時に〕及べ。〔そして〕纔かに個（ひとつ）の「嘗聞」・「嘗讀」を説くを得。〔さらに〕又た孔子の口中に『禮記』・『春秋』・『孝經』

を引けば、但だ「記」字・「經」字を用いる可からざるのみならず、亦た「嘗讀」の字も用いる可からず。蓋し「禮」は乃ち七十子の記す所、今に至るまで「經」字無し。『春秋』は乃ち孔子の作る所、『孝經』は乃ち曾子の述べる所なれば、爾の時、尚お未だ經と稱せず。故に凡そ〔八股〕文を作るに、孔子の口中に在りて六經を説けば、止だ是れ細心ならざるのみなるや（『増訂初學起講秘訣』引古擒題起法・三十六葉）。

題目：居上不寛（『論語』八佾） 單句截脚題 引古擒題反起反收法

嘗讀書曰御衆以寛、則知身統民物者、不可不寛也明矣、顧寛以御衆者、胞與引古反起之懷、而嚴以待人者、刻苛之念、上無仁政、而下有怨咨、君子惜其臨民之無反擒不寛本矣／試爲居上者思之承上

（嘗て『書』を讀むに曰く「衆を御するに寛を以てす」①と、則ち身は民物を統べる者にして、寛くせざる可からざるや明らかなるを知る、顧だ寛以て衆を御する者は、胞與②の懷あり、而らば嚴以て人に待する者は、刻苛の念あり、上 仁政無く、下 怨咨③有れば、君子 其の民に臨むの本無きを惜しむ／試みに上に居る者の爲に之を思う）

①『書經』大禹謨に「衆を御するに寛を以てす」（〔註釋〕三十八葉）。

②「西銘」に「民は吾が同胞、物は吾が與（ともがら）なり」（〔註釋〕三十八葉）。

③『書經』君牙に「小民 惟れ曰いて怨み咨（なげ）く」（〔註釋〕三十八葉）。

〔作法〕反起の一層は、古を引きて明擒し、題に入りて斬截す。正承・〔正〕轉の一層は、起の意を蒙けて正に轉じ、「不寛」を説き到る。正收の一層は、本題に切にして下を留め、語氣 恰も合す（『増訂初學起講秘訣』引古擒題起法・三十七葉～三十八葉）。

⑨兩層夾翻法（兩層もて夾して翻するの法）

『文法一揆』によると、夾とはさしはさむの意味とする。

夾とは、兩意を以て正意を夾出すること、猶お兩軍 一軍を撃つに、前後敵を受け、躲閃（回避）す可きこと無きがごとし、題竅（題の秘訣） 盡く出す（『文法一揆』巻二・夾条・七十一葉）。

また、『文法一揆』によると、翻には解釈をひっくり返すという意味と、ひっくり返して勢いをつけるという意味の二つがあるという⁽⁵⁾。

翻に二義有り。一は翻案（くつがえす）なり。常解を翻去するを謂う……一は翻騰（かき回す）なり、掀翻（ひっくり返す）して勢いを作すなり……（『文法一揆』巻一・翻条・三十三葉）。

兩層夾翻法は、起・承・轉・收の中の、続きの二段落（主に起の段落と承の段落）を用いてさしはさんで翻（くつがえす・ひっくり返す）して題目を解釈する方法である。

兩層夾翻法 第九則

凡そ題中に緊要（重要な）^{じづら}の字面なるも、透醒（はっきり）し易からざる者有れば、兩層夾翻法を用いるより妙なるは莫し。但だ夾翻は須く兩層の^{いみ}意思の絶えて相い同じからざるを要すべし。或いは高低の翻を用い、或いは淺深の翻を用い、或いは遠近の翻を用うるは、須く明白に透露（現し）し、題字の精神をして和盤托出（すべて持ち出す）せしむべければ、方（まさ）に妙なり。但し轉捩（逆方向に転じる）する處、亦た直捷なるを要し、切に拖泥帶水（言葉が簡明・明解でない）にして、以て轉折するに不靈（悟らない）なるを致す可からず。初學 此れを解すれば、意を用いて自ずから能く沈着にして、筆を用いて亦た自ずから平らか（平板）ならず（『増訂初學起講秘訣』兩層夾翻法・四十葉）。

題目：可以爲文矣（『論語』憲問） 單句須蒙上題 兩層高低夾翻反起
正收法

（5） 翻については、『初學題類文法合編』（光緒五年刊）で次のように述べられている。

〔翻筆〕「翻」と「反」しは同じからず。題〔目〕 此の如しと説くも、〔八股〕文 此の如からずと説くを「反」と曰う。題〔目〕 此の如しと説くも、〔八股〕文 必ずしも此の如からずと説くを「翻」と曰う……（『初學題類文法合編』下巻・一葉）。

且天下有經天緯地，而赫然諡爲文者，此其人固不易逮也，天下亦有竊位蔽賢，
反起而儼然稱爲文者，此其人又無足取也，惟有知人之識，而有忘己之心，將所謂
反承錫民爵位者，覺一字之褻，千秋不朽矣／吾聞同升一事，能無畢然於文子乎
正轉
正收
末句
（且そも天下に經天緯地（法律）有り，而して赫然として諡して文と爲す者は、此れ其の人固より逮び易からざるなり，天下 亦た「竊位蔽賢」②有り，而るに儼然と稱して文と爲す者，此れ其の人 又た取るに足る無し，惟だ人を知るの識有り，而して己を忘るの心有り，將に所謂ゆる「民に爵位を錫うを文と謂う」者，一字の褻（ほめる）を覺して，千秋不朽なり／吾れ「同じく升る」の一事を聞き，能く文子に畢然たる無けんや）

- ①『國語』周語下に「經の天を以てし，緯の地を以てし，經緯 爽わず，文の象なり」。
- ②『論語』衛靈公に「子 曰く，臧文仲は其の位を竊む者か。柳下惠の賢を知りて，而も與に立たざるなり」。
- ③『逸周書』諡法に「民に爵位を錫うを文と謂う」。『論語章句集注』（憲問・「子聞之曰，可以爲文矣」条）に「諡法に亦た所謂ゆる民に爵位を錫うを文と謂う者有り」とある。

〔作法〕起の一層は是れ高一層翻法なり。承の一層は是れ低一層翻法なり。正轉の一層は註疏に照らして本題を明らかにす。正收の一層は上の「同升」を蒙りて，切文字作合（『増訂初學起講秘訣』兩層夾翻法・四十葉）。

⑩通講全翻一句到題法（通講全翻し一句もて題に到るの法）

通講全翻一句到題法は，通講（全部理解して）して全てをひっくり返して一句で題目を解釈する方法である。

通講全翻一句到題法 第十則

文を作るは最も平衍（平板）を忌む。平衍とは，題の正面に就きて敷衍するなり，故に平らか（平板）なり。其の平らかならざらんと欲せば，翻に如くは莫し。翻に高低・淺深・遠近・對面・旁面の諸法有り。〔本〕集中 已

に全く備う。若し通講全翻なれば、則ち意を用いること既に平らかならず、筆を用いること亦た平らかならず、遣詞造字（文章を作る時、詞を用いて意を立てる）して遂に一にして平らかなる無し。其の法 愈々翻なれば愈々深く、愈々翻なれば愈々緊なるを以て佳しと爲す。之を撃鼓に譬うるに、愈々撃てば、則ち聲 愈々響く。之を曲を唱うに譬えるに、愈々唱うに、則ち曲 愈々高し。其の氣機（行文の迫力）の洋溢（満ち溢れる）、興會（興に乗ること）の淋漓（のびやかなさま）、頓（ただ）ちに之を閱る者をして睜開（目を開いて）倦眼せしむ、眞に勝ちを制するの法なり（『増訂初學起講秘訣』全翻一句到題法・四十三葉）。

題目：我欲仁（『論語』） 全翻步步緊法

且天生我而予以仁、仁與我固一原者耳、而特恐我之漸離於仁也、而又恐我之
前一層起 難視夫仁也、而尤恐我之距乎仁、不迎乎仁、反承反轉 背乎仁、不向乎仁、而岐仁與我
 而二之也、於是我自爲我、仁自爲仁、而自我而放之者、不復自我而求之矣／
反收 然亦有求之之道在
末句 （且そも天 我を生じ与えるに仁を以てす、仁と我とは固より一原なる者の
 み、特に我の漸く仁に離るを恐れ、又た我の夫の仁を視難きを恐る、尤も我
 の仁に距てられ、仁に迎えず、仁に背き、仁に向わず、仁と我とを岐して之
 を二とするを恐る、是に於いて我 自ずから我と爲り、仁自ずから仁と爲る、
 我よりして之を放つ者、復た我よりして之を求めず／然らば亦た之を求む
 るの道の在る有り）

〔作法〕起の一層は、原頭の上より説き、先ず題字を將って點醒す。承・轉の一層は、一步緊一步（一步一步段階を踏む）にして、我の仁に遠ざかる所以の處を説く。收の一層は、翻して「欲」字に到る。末句は、本位を拍轉す（『増訂初學起講秘訣』全翻一句到題法・四十四葉～四十五葉）。

⑪ 旁面擒題法（旁面もて題を擒えるの法）

旁面擒題法は、側面から題目を擒えて解釈する方法である。

旁面擒題法 第十一則

文に反面・對面の諸法有り。旁敲側擊（直接に本意を述べず、側面から回りくどく觀點を表明する）すれば、尤も以て題義を透露（現し）するに足ること、猶お兵家の聲東擊西（東を撃つとみせかけて西を攻める。敵に錯覚を生じさせる戦術）がごときなり。但し旁面に亦た諸法有り。旁より陪襯（引き立てる）を作る者有り。題意 逼仄（狭苦しい）し、旁より著筆（筆を下す）し以て養局する者有り。亦た題を相して之を施すのみ。然れども此の兩法は、一篇の文字の中に於いて、偶一（たまたま）に之を用いるに過ぎず。又た題義 全く本題に在らず、而して全く旁面に在りて看出する者有り。「夫子晒之」（『論語』先進）一句の如きは、宜しく三子の目中より看出すべし。「師冕見」より「師冕出」（『論語』衛靈公）の數句に至るまでは、宜しく子張の目中より看出すべし。「樊遲未達」（『論語』顏淵）題に及べば、宜しく夫子の目中より看出すべし。「子出」（『論語』里仁）の二字題は、宜しく門人の目中より看出すべし。諸々の此の如きの類は、正に復た少なからず。一二を擧げるに因り、以て隅もて反（かえ）るを冀う（『増訂初學起講秘訣』旁面擒題法・四十六葉）。

題目：周之德其可謂至德也已矣（『論語』泰伯） 贊歎題 旁面陪襯正

起正收法

且我周世德作求、而三讓有心、吾嘗以至德推泰伯矣、顧德之以孝見者、固以
正起 盡孝爲至、而德之以忠見者、尤以盡忠爲至、一經追想之餘覺、不欲以才見者、
正轉 殊令人景仰夫明德也／三分有二、以服事殷、文王豈欲以才見哉
末句

（且そも我が周の世德求むるを作すや、三たび譲りて心有り、吾れ嘗て至德を以て泰伯を推す、顧だ德の孝を以てあら見わるる者、固より孝を盡くすを以て至れりと爲す、而して德の忠を以て見わるる者、尤も忠を盡くすを以て至れりと爲す、一たび追想の餘覺を経て、才を以て見わるるを欲せざる者、殊に人をして夫の明德を景仰せしむるなり／三分して二を有ち、以て殷に服事す、文王 豈に才を以て見わるるを欲せんや）

〔作法〕正起の一層は、泰伯を將つて襯（際出たせる）と作し、確切として移らず。承轉の一層は、「孝」字・「忠」字を將つて分貼し亦た的す。正收の一層は、「才」の字の來脈に跟定し、恰も贊嘆の神に合す（『増訂初學起講秘訣』旁面擒題法・四十六葉）。

⑫借賓定主法（賓に借りて主を定めるの法）

借賓定主法は、主賓をもてなすために、陪客を利用するようにして題目を解釈する方法である。

借賓定主法 第十二則

文に開合有れば、即ち賓主有り。陪客（正客の相手をつとめる客）之を賓と謂い、本題 之を主と謂うなり。何を以て借賓定主と言う。猶お彼に借り陪を作し以て本題を定めると云うがごときなり。譬えば席を設けて客を宴するに、主席なる者は就（まさ）に是れ主なり、其の餘の衆客は皆な是れ賓なり。陪客に請いて以て主席に宴樂（宴席をもうけて歓待する）するは、其の意 原と専ら主席の爲に設く。若し陪客無ければ、便ち寂寞として味

寡なし。然れども又た相い類せざるの人を以て強いて其の陪を作す可からず。故に借賓定主法は必ず兩處の意義事實、銖兩悉く稱せられれば（兩者の輕重・優劣が等しい）、乃ち親切（適切）と爲す。其の法 起處は必ず先ず總冒（おおきく覆う）にして、以下の兩層は、遙遙として對を作す。所謂ゆる一頭兩脚（テーマはひとつだがかわることはふたつ）なり。惟れ此の法 記敘題に施せば、則ち宜し。若し口氣に入れば、則ち用いる可からざるなり（『増訂初學起講秘訣』借賓定主法・四十九葉）。

題目：子路曾皙冉有公西華侍坐（『論語』） 總冒記敘題

管聞之禮矣，一則曰侍坐於先生，再則曰侍坐於君子，此固請業之常也，而非
正起 論於吾黨，然吾黨之侍坐，亦不一矣，有以德爲序而誌之者，則如顏淵季路侍
拍題首 是，有以齒爲序而誌之者，則如子路曾皙冉有公西華侍坐是／吾夫子抱老安少
承上 懷之願，既不獲見用於世，而僅與其徒輩坐，論一堂，夫亦行自傷矣，雖然，試
賓 末句

竊思之

（嘗て之を禮に聞く、一に則ち「先生に侍坐するは」（『禮記』曲禮上）と曰い、再び則ち「君子に侍坐するは」（『禮記』曲禮上）と曰う、此れ固より業を請う①の常なり、而吾が黨を論ずるに非ず、然れども吾が黨の侍坐は、亦た一ならず、徳を以て序と爲して之を誌す者有れば、則ち顔淵・季路の侍するが如き是れなり、齒以て序と爲して之を誌す者有れば、則ち子路・曾皙・冉有・公西華の侍坐するが如き是れなり／吾が夫子 老安少懷②の願いを抱きて、既に世に用いらるるを獲ず、而るに僅かに其の徒輩と坐して、一堂に論ず、夫れ亦た自傷を行うか、然りと雖も、試みに竊かに之を思う）

①『禮記』曲禮上に「業を請えば則ち起ち、益を請えば則ち起つ」。

②『論語』公治長に「子 曰く、老者は之に安んじ、朋友は之を信じ、少者は之に懷（なつ）く」。

〔作法〕正起の一層は、古を引きて證を作す。「侍坐」二字を擒え、即ち拍して本題に到る。承の一層は、即ち下の兩層を開出し來る。賓の一層は、是れ序するに徳を以てす。主の一層は、是れ序するに齒を以てす。「徳」・「齒」の二字は鍊し得て精なり、自ずからはれ好き陪客なり。講じ下るに夫子の身上よりし、下文を涵照す。題中の「坐」字を點し、妙は反面に在り。故に緊にして仍お寛なり（『増訂初學起講秘訣』借賓定主法・五十葉）。

以上、『増訂初學起講秘訣』に示された十二の解釈方法について述べてみた。起講についての解法はこれ以外にも多くある。いま検討した『増訂初學起講秘訣』のものと重なるものもあるが、『小試花樣度針合選』には、次のような解法があげられている。

一線穿成法・以淺形深法・借賓定主法・雙線度針法・反振跌題法・彈丸脫手法・點染映合法・單刀直入法・雙峰對峙法・融洽分明法・曲折赴題法・兩層搓挪法・明擒題字法・借擒引題法・旁面引題法・單筆撲題法・反面引題法・旁面映合法・借擒對峙分疏法・冒下而入法

また、唐彪によると、起講の解法には、

題前寛説法・題前補襯法・就題虚起法・虚取題神法・開閣法・借賓陪主法・援古証今法・引經斷事法・推原來歷法・故作疑案法・反題説法・急擒題字法・講首先虚籠下意、後轉入本題法・反挑法・雙起側落法・兩路順襯題情法・兩路反襯題情法・兩路相商、折出題情法・巧襯法・暗比題正講法・口氣題斷做法・從上文褪入本題法・即上文別出本題法・將上文粘合本題法・將上文陪講、作一家賓主法・暗頂上文、不露字眼法・講首頂遠脉、講中講末頂近脉法・專頂遠脉、或專頂近脉、即借勢點出題面、或帶出題字法・單頂上文、竟全不及本題法

などがあるという（『讀書作文譜』卷之九・六葉～七葉）。

ただし、(2) で検討したように起講は言い方は異なることもあるが、基本的には起・承・轉・收の四段落からなるということには変わりはない。

おわりに

以上検討してきたことを『増訂匯學讀本』では、次のようにまとめて述べている。

起講は乃ち文章の入頭（入り口）の處なり。開口（話し始める）すれば即ち須く題〔目〕に切なるべし、寛泛（内容意義等が広範囲になる）なる可からず。然れども却って含蓄あるを要し、最も説き盡くすを忌む。説き盡くせば則ち提掇（提出）する處 又は是れ頭上より説き起こし、便ち重複して厭う可きなるを覺ゆ。所謂ゆる切ならんと欲するも盡さんと欲せざる者なり。其の法……〔は反起正接・正起反收・先開後合などがあるが〕、要するに題の運筆を相る^みに在り。一律に論ずる可からざるなり（光緒十四年『増訂匯學讀本』起講先正法脈精言・四十一葉）。

そして、起講の起・承・收の三段落について述べる（(2) で検討したように、普通は轉の段落を含めて四段落とする）。起の段落は、渾起や明起などがあり、それを承けて承の段落を作り、それを收の段落で終えるという。また、起講のあたまの部分には、口氣題であれば「若曰」・「若謂」・「意謂」・「今夫」・「且夫」

- ・「嘗觀」などの字を用い、断定的な題目であれば、「今夫」・「且夫」・「從來」・「嘗觀」などの字を使うとする。

起講の開手に三四句を用いて渾起する者有り。本題の二三字を拈（つまみ出し）して明起する者有り。次は二句或いは四句を用いて起の局（部分）を〔承の段落を作って〕承接す。要するに工練（対句を整えること）切當（適切である）を以て主と爲す。而して開合〔法〕・分對〔法〕の中〔においては〕、更に須く一氣もて貫注すべし、後は三四句或いは兩三句を以て收を作す。起講の開端（はじめ）に至れば亦た字法に應じ用いる有り。口氣題の如きは、則ち「若曰」・「若謂」・「意謂」を用い、以て「今夫」・「且夫」・「嘗觀」等の字に及び、用いる可からざる無し。斷做（断定）するが若き者なれば、正に宜しく「今夫」・「且夫」・「從來」・「嘗觀」等の字を用いるべし（光緒十四年『増訂匯學讀本』起講先正法脈精言・四十一葉）。

そして、対句を用いた場合は秩序だったものにし、散文体であればなめらかであることが必要であると述べる。

起講の對句は整齊（秩序ある）なるを要す。散作（散文体）は流暢（なめらか）なるを要す。對なる者は多く賓を以て主を形（あらわ）し、散なる者は多く虚を以て實を形わす。賓主・虚實に審しくして、外に難事無し（光緒十四年『増訂匯學讀本』起講先正法脈精言・四十一葉）。

また、『増訂初學起講秘訣』では、起講の最初の一段落（起）が最も重要であると述べる。

……〔起講の形式の〕大局は、起・承・轉・收と反正・開合に外ならず。而して〔これらの〕數層の中、開首の一層 尤も忽せにする可からず。蓋し場中の提筆看文するものは、著眼 尤も此の處に在り（『増訂初學起講秘訣』「起講總論」条・先正法脈精言・一葉～二葉）。

そして、後に続く「八比」の部分と起講とは、頭と体との関係のようなものだという。

蓋し八比（八股の部分）は人の四肢の如し。而して起講は則ち人の元首の如し。元首 必ず四體と相い稱^{かな}う。故に五官 端好にして、方に頭の大面（みかけ） 氣色鮮明なれば、一見し人をして爽目せしむ。若し四體 長大にして、元首 尖小醜惡なれば、觸目して厭を生ぜざる能わんか（『増訂初學起講秘訣』「起講總論」条・先正法脈精言・二葉）。

このように、起講は後に続く八比の部分の導入部であり、聖人・賢者となったつもりで全体の要点を簡潔に述べる箇所であったのである。